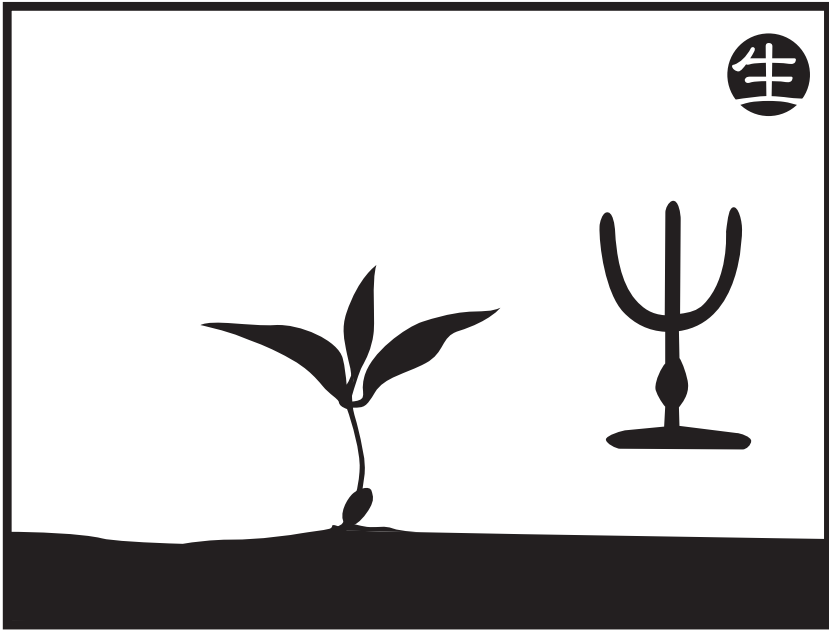


# 白川静のことば

《34》



金子都美絵・画

生は草木の初生をいう語である。これに対して、獣には産といい、卵生のものには孵という。産はもと人の出生を示す字であるが、のち卵生のものに対して胎生のものという語となった。産や孵はいわば個体としての営みであるが、草木の生成はそのまま長く発展をつづけるものであるから、生はのち生命一般をいう語となった。「説文」六下に「生は進むなり。艸木の生じて土上に出づるに象る」という。生は耕韻、進は真韻、古くは合韻の字で、藁、牲と声義が近い。生の系列字には性、姓、腥などがあり、肉体的な感じをもつ字ではあるが、全文には生を青の形にするものがあり、目の形は種子の象である。そこに無限の生命力が宿されていて、生成が行なわれる。無から有を生ずるようなその現象を、古い国語では「生る」といった。「生る」とは「顯る」、見えなかったものが、はじめてあらわれることをいう。

あらわれたものが成長してゆくことを「生る」という。ナ行の音に「和ぐ」「摩ぶ」「柔ぶ」「沾る」「延ぶ」などの語があり、いずれも新生のものが生長する過程の状態に関係のある語である。

《文字逍遥》平凡社ライブラリー P10 「漢字古訓抄」よ(5)

